

確率的非巡回型神経回路網のための連結相関学習法

5H-4

角田 有希 三谷 光照 大堀 隆文 渡辺 一央
北海道工業大学 電気工学科

1 まえがき

ゆらぎをともなう線形しきい値ニューロン群からなる確率的非巡回型神経回路網 (PFN, Fig.1) の動作を解析し, 新たな学習法として連結相関学習法を提案する。また, 簡単な学習課題に適用した結果について報告する。

2 ニューロンモデル

PFNを構成する各ニューロン*k* (Fig.2) は, 独立なゆらぎ源 $n_k(t)$ を有し, 情報伝達諸量が入力パターン p によって変化するが, 一定入力に対してもゆらいでいる, ことを除いては McCulloch-Pitts のニューロンモデルと同じである。ニューロン k の入力パターン p に対する入出力関係は, 以下のように記述できる。ただし, $\langle \cdot \rangle$: 期待値, $f(\cdot)$: 線形しきい値関数, T : 転置を表し, 定義されたベクトルは列ベクトルとする。

- シナプス前ニューロン群出力: $q_k(p, t) \in \{0, 1\}$ (1)
- 入力総和: $u_k(p, t) = w_k^T q_k(p, t)$ (2)
- 瞬時活性値: $v_k(p, t) = u_k(p, t) + n_k(t)$ (3)
- 瞬時出力値: $r_k(p, t) = f\{v_k(p, t)\}$ (4)

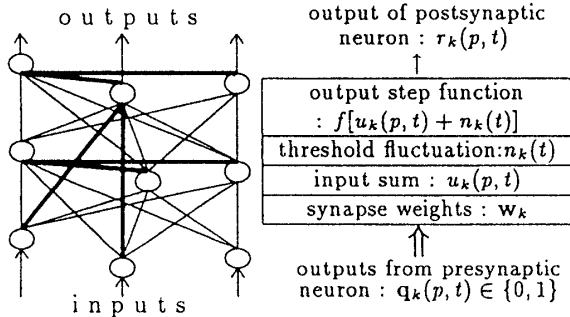


Fig.1 Probabilistic Feedforward NN

Fig.2 Model of a neuron k for PFN

3 情報伝達諸量の確率的表現

PFNの情報伝達諸量について離散時間確率系で考察する。ある入力パターン p の入力継続期間におけるニューロン k の伝達諸量 $q_k(p, t)$, $u_k(p, t)$, $n_k(t)$, $v_k(p, t)$, $r_k(p, t)$ を確率変数として q_k , u_k , n_k , v_k , r_k で表し, 各確率変数の分布を $Q(q_k)$, $U(u_k)$, $N(n_k)$, $V(v_k)$, $R(r_k)$ で表す。このとき伝達諸量の確率分布は, 以下の特徴, 関係をもつ。以下, 時間変数 t , パターン変数 p を省略する。

$$V(v_k) = \sum_{q_k} Q(q_k) N(v_k - w_k^T q_k) \quad (5)$$

$$R(r_k = 1) = \sum_{q_k} Q(q_k) \int_0^\infty N(v_k - w_k^T q_k) dv_k \quad (6)$$

$$R(r_k = 0) = 1 - R(r_k = 1) \quad (7)$$

ニューロン出力 r_k は後続のニューロン j の入力ベクトル q_j を構成し, $S(j)$ を j のシナプス前ニューロン群の集合とすると, その確率分布 $Q(q_j)$ は, 次式で表される。

$$Q(q_j) = Pr\{r_k : k \in S(j)\} \quad (8)$$

一方, 瞬時出力誤差 e は,

$$e = \sum_{k \in S_{v_0}} r_k + \sum_{k \in S_{v_1}} (1 - r_k) \quad (9)$$

と表せる。ただし, S_{v_0} , S_{v_1} は, 教師信号が 0 または 1 になる可視ニューロン群の部分集合を表す。

4 連結相関学習法

4.1 学習原則

あるパターン入力継続期間における瞬時出力誤差 e の期待値 $\langle e \rangle$ の結合係数 w_k に関する最急降下法によって最小化する。結合係数の修正量 $\Delta_p w_k$ は, 次式で与えられる。

$$\Delta_p w_k^T = -\epsilon \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial w_k} = -\epsilon \sum_{q_k} Q(q_k) \frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial w_k} \quad (10)$$

ただし, $\langle \cdot : q_k \rangle$ は q_k 下での期待値を表す。

Probabilistic Feedforward Neural Network and its High-ordered Correlation Learning
Kakuta YUUKI, Mitsuaki MITANI, Takahumi OOHORI, Kazuhisa WATANABE
Hokkaido Institute of Technology, Teine-ku, Sapporo, JAPAN

4.2 誤差の期待値 $\langle e \rangle$ の結合係数依存性

式(10)の偏微分量 $\partial \langle e : q_k \rangle / \partial w_k$ を次式で表す。

$$\frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial w_k} = \frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial \langle v_k : q_k \rangle} \cdot \frac{\partial \langle v_k : q_k \rangle}{\partial w_k} \quad (11)$$

ゆらぎに, 条件 $1: \langle n_k \rangle = 0$, を導入すると, 式(3)より式(11)は,

$$\frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial w_k} = \frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial \langle v_k : q_k \rangle} \cdot q_k^T \quad (12)$$

となる。ここで, $\langle e : q_k \rangle$ を r_k 下での誤差期待値として表すと,

$$\langle e : q_k \rangle = R(r_k = 0 | q_k) \langle e : (r_k = 0 : q_k) \rangle + R(r_k = 1 | q_k) \langle e : (r_k = 1 : q_k) \rangle \quad (13)$$

となる。また, $\langle e : (r_k : q_k) \rangle$ は r_k の状態によってのみ変化し, $R(r_k | q_k)$ は式(6),(7)の関係をもつ, ことから, 式(12)の偏微分量 $\partial \langle e : q_k \rangle / \partial \langle v_k : q_k \rangle$ は次式となる。

$$\frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial \langle v_k : q_k \rangle} = \{ \langle e : (r_k = 1 : q_k) \rangle - \langle e : (r_k = 0 : q_k) \rangle \} N(-\langle v_k : q_k \rangle) \quad (14)$$

さらに, $r_k = \{0, 1\}$ は $\{v_k < 0, v_k \geq 0\}$ に対応し, 式(14)の誤差期待値を確率的に表すと, 次式となる。

$$\frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial \langle v_k : q_k \rangle} = \sum_e e \{ Pr(e | \{v_k \geq 0 | q_k\}) - Pr(e | \{v_k < 0 | q_k\}) \} N(-\langle v_k : q_k \rangle) \quad (15)$$

ここで $Pr(e | \{v_k \geq 0 | q_k\})$, $Pr(e | \{v_k < 0 | q_k\})$ は, $v_k \geq 0, v_k < 0$ それぞれの範囲内で一定である。またゆらぎに, 条件 $2: N(x)$ は媒介変数 $g(x)$ を介して, 任意の x_0 で,

$$N(x_0) = \int_0^\infty g(x + x_0) N(x + x_0) dx \quad (16)$$

を満たす, を導入すると, 式(15)は次式となる。

$$\frac{\partial \langle e : q_k \rangle}{\partial \langle v_k : q_k \rangle} = \sum_e e \int_{-\infty}^\infty g(n_k) \cdot Pr(e | \{v_k | q_k\}) N(n_k) dn_k \quad (17)$$

よって, 式(10)の偏微分量 $\partial \langle e \rangle / \partial w_k$ は, 式(12),(17)を式(10)に代入することにより次式を得る。

$$\frac{\partial \langle e \rangle}{\partial w_k} = \sum_{q_k} \sum_e e \int_{-\infty}^\infty g(n_k) \cdot q_k^T Pr(e, n_k, q_k) dn_k \quad (18)$$

4.3 学習則 (結合係数修正式)

$N(n_k)$ が標準正規分布のとき, 式(16)から $g(n_k) = n_k$ を得る。よって, 式(18)より以下の簡潔な学習則を得る。

$$\Delta_p w_k = -\epsilon \langle e \cdot n_k \cdot q_k \rangle \quad (19)$$

5 シミュレーション

各層ユニット数 (4-4-4) 個の3層ニューラルネットに対して, 4次元 Random-mapping 課題を適用した。パターン入力継続期間における標準正規分布ゆらぎのサンプル数 1000 個, $\epsilon = 0.1$, 結合係数初期値 10 系列を用いて, 学習を行った。その結果, 初期値 10 系列すべてが収束することを確認した (Fig.3)。

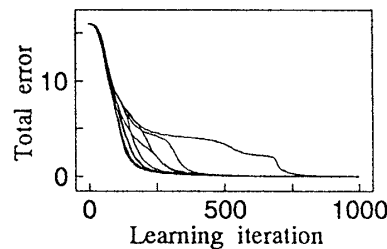


Fig.3 Learning curves in Random-mapping problem

6 むすび

線形しきい値ニューロン群からなる PFN のための連結相関学習法を提案した。理論的検討から, 本学習法は, (1) 情報伝達諸量の瞬時値 (出力誤差, ゆらぎ, シナプス前ニューロン出力) の積の期待値を用いて結合係数を修正可能, (2) すべての結合係数を並列かつ同時に修正可能, (3) 層構造を意識することなく学習処理可能, などの特徴を有する。また, 4次元 Random-mapping 課題により学習可能であることを確認した。今後, 性能支配要因等について検討する。